

平成 21 年 6 月 4 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2006 年度～2008 年度
 課題番号：18520308
 研究課題名（和文）
 フランス語会話コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究
 研究課題名（英文）
 Semantic study on the construction and the understanding of discourse based on corpora of conversational French
 研究代表者
 東郷 雄二 (TOGO YUJI)
 京都大学大学院・人間・環境学研究科・教授
 研究者番号 10135486

研究成果の概要：本研究では、会話フランス語で従来の先行詞・照応詞という語と語の関係に基づくモデルでは説明が不十分な事例を検討し、照応過程は語と語の関係ではなく、話し手と聞き手の記憶領域に登録されたもの同士の関係であり、照応のような言語現象を理解するためには、話し手と聞き手の心のモデルが必要であることを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	330,000	2,030,000

研究分野：人文社会系

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：フランス語、照応、談話、意味

1. 研究開始当初の背景

先行詞と代名詞などの照応詞の関係は、テキスト言語学においてはテキスト内の語と語の関係 (endophora) と見なされ、照応詞は先行詞の代用 (substitution) とされてきた。しかし、この見方では先行詞のない代名詞や、先行詞と数・性の一致しない代名詞を説明することができない。会話フランス語においてはこのような事例が多数見られることはよく知られている。本研究ではこのような現象を説明するために、まず会話フランス語を詳細に分析し、テキスト言語学的見方では説明できない事例を収集し、それに代わる説明の理論を構築する必要があるとの認識から出発した。またテキスト言語学に代わる意味理

論を探す必要があることは明らかであった。しかし、従来意味理論として代表的な形式意味論では文が分析の限界であり、文の集合である談話における情報の累積性が表現できないという欠点がある。Fauconnier のメンタル・スペース理論はこのような形式意味論の欠点を背景に生まれたものであり、一定の範囲で談話情報の蓄積性を表現できる。しかし、メンタル・スペース理論には談話の参与者である話し手と聞き手の関係が欠落しており、本研究はこの点を克服しなければ、照応のような言語現象は解明できないという認識から出発した。

2. 研究の目的

本研究では上記の背景に書いた問題意識から出発し、Fauconnier のメンタル・スペース理論に依拠する心的モデルである談話モデル理論を、会話フランス語の事例を基にして構築し、テキスト言語学ではうまく説明できない照応過程を解明することを目的とした。また形式意味論が苦手とする文の境界を越える現象における談話情報の累積性を談話理論にいかにか整合的に組み込むかも、照応過程の解明に必要なことであるとの認識から、これを目標のひとつに設定した。

3. 研究の方法

本研究では実際の会話でよく生じる照応現象を会話フランス語のコーパスから収集し、それがテキスト言語学的な代用の概念では説明できないことを確認し、それに代わるべき説明原理を追求した。理論面では、Fauconnier のメンタル・スペース理論に話し手と聞き手という要素を加えて拡張し、談話を扱うことができる談話モデル理論を構築した。このような話し手と聞き手の相互行為を表示できる心的モデルを構築することにより、照応過程の解明に必要な談話情報の累積性を表現することが可能になるという見通しがあった。

また形式意味論において談話の累積性を表現する試みである動的意味論、Heim のファイル変換意味論、談話表示理論などの現代的意味論を比較し、その利点と欠点を詳細に検討した。この成果はそのまま談話モデル理論のさらなる改善につながっている。次に名詞句の意味解釈の具体的事例として、フランス語の存在文を取り上げ、談話モデル理論に基づいて分析を行った。

4. 研究成果

(1)本研究の研究成果の第一は、会話フランス語に実際に現れた照応過程の分析により、照応は話し手と聞き手の相互行為に強く依存する現象であることを明らかにした点にある。テキスト言語学の見方では、照応過程は先行詞が照応詞によって代用(substitution)されるという、語と語の関係と見なされてきた。この見方は学校文法においても現在なお広く行き渡っている見方である。しかし実際の会話においては、例えば「君、あの件どうなった?」のア系指示詞の用法に見られるように、たとえ先行詞がなくても話し手と聞き手の間で共有度が高い指示対象は指示表現で指示することができる。また「先週行ったあのベトナム料理店はおいしかったですね」のア系指示詞も見かけ上先行詞を持たず、自己照応的である。このような指示詞の用法は、話し手と聞き手の共有知識に依存しており、共有知識は話し手と聞き手の相互行為とし

ての談話において、きわめて大きな役割を果たしている。テキスト言語学的な語と語の関係に基づく理論では、このような事例を扱うことができないのは明白であり、本研究はこの点を明らかにしている。

(2) 標準的な形式意味論においては、A dog came in. (一匹の犬が入って来た) の不定名詞句 a dog は存在量化表現と見なされてきた。存在量化子には作用域があり、通常、作用域は文の終わりまでと考えられている。するとこの文に続けて It lay down under the table. (それはテーブルの下に横たわった) とした場合、代名詞 it は存在量化表現の作用域の外にあるため解釈できなくなってしまう。形式意味論のこの欠点が文を越えた談話情報の累積性を表現することができないという不備によることは明らかである。この不備を補うため、動的意味論や談話表示理論が提唱されたが、いずれも談話中の指示対象を変数として扱うため、本当の意味で談話の累積性を表現しているとは言い難い。本研究では Fauconnier のメンタル・スペース理論を修正して、話し手と聞き手という要素を加え、共有知識領域、発話状況領域、言語文脈領域という三つの下位領域を設定し、文中の名詞句の指示対象に当たる談話指示子(discourse referent)が登録されるという心的モデルを採用した。このモデルは本研究に先立つ科学研究費補助金による一連の研究において、すでに開発されているものである。談話に現れる照応表現は、先行詞という語を指すのではなく、談話モデルの言語文脈領域に登録された談話指示子(文脈照応の場合)や、発話状況領域に登録された談話指示子(外界指示の場合)や、共有知識領域に登録された談話指示子(観念指示の場合)を指すと見なすことにより、先行詞のない照応表現を処理することができ、また「君、あの件どうなった?」のア系指示詞の用法にみられる、話し手と聞き手の共有する記憶を指す指示詞の用法もうまく扱うことができることを示した。

(3) 談話においては言語によって構築された談話世界の中で指示が行われる。そして談話世界の構築は、談話の進行とともに変化する。したがって照応過程の分析においても、刻々変化する談話世界を考慮する必要がある。たとえば Recanati が明らかにしたように、Since it was stuffy in the house, he went up to the attic and opened the window. (家の中はむっとしていたので、彼は屋根裏部屋に上がって窓を開けた)において、定名詞句 the window は家全体と相対的に解釈されるのではなく、the attic と相対的に解釈され、屋根裏部屋の窓と理解される。一般に定名詞句の解釈には解釈領域が必要であり、the sun や

the moon のように世界に唯一存在する対象の場合、解釈領域は最大の世界全体である。実際の談話においては、話し手と聞き手の相互行為における調整過程に基づいて、定名詞句の解釈に必要な解釈領域は、暗黙のうちに調整され狭められていると考えられる。上の例では、解釈領域は家全体から屋根裏部屋への狭められていて、家の窓ではなく、屋根裏部屋の窓と解釈するのが自然である。談話モデル理論においては、文が構築する談話世界は言語文脈領域に形成され、談話の進行とともに動的に調節されると表現することができる。この解釈領域の動的変化もまた、照応過程を文中の語と語の代用関係だとするテキスト言語学の見方では扱うことができないのは明らかである。このような解釈領域の動的性格を談話理論に組み込むためには、談話を単なる文の集合と見なすのではなく、文の表す言語情報に基づいて話し手と聞き手の心の中に構築される心的記憶領域だと見なす必要がある。本研究はこのような談話の性格を明らかにした。

(4)「机の上にバナナがある」のような物の存在を表す存在文は、英語では **there** 構文、フランス語では **il y a** 構文を取り、他の文には見られない特異な統語的・意味的特徴を示すことが知られている。**there** 構文の実主語が不定名詞句に限られるというのもそのひとつである。従来この制約は、定名詞句は存在前提を持つため、その存在を改めて言明するのは矛盾であり、実主語は新情報でなくてはならないとする機能文法的説明で語られることが多かった。しかし、**Look ! There's Harry with his red hat on.** (見て。赤い帽子をかぶったハリーがいるよ)のような眼前描写存在文においてはこの制約は解除され、定名詞句が生じることができる。新情報による機能文法の説明ではこのことをうまく説明することができない。

本研究ではフランス語と日本語の存在文を詳細に分析し、(3)で述べた名詞句の解釈領域の概念が、この分析にも有効であることを示した。眼前描写文の解釈領域は談話モデルの発話状況領域であり、この領域に登録される談話指示子は、Carlson の言う **stage** レベルの存在である。**object** レベルでは談話モデルに存在前提を持つ対象であっても、その **stage** レベルへの切り出しは発話状況領域に存在前提を持たない。したがって眼前描写文による言明で、定名詞句は **stage** レベルの解釈においては新情報となり、その存在を述べることには言語的意味がある。このように従来定名詞句が持つとされてきた存在前提を、談話モデルを構成する領域と相対的に捉えることによって、存在文に定名詞句が生じるケースを矛盾なく説明できるようになる。

一方、**There are many Americans who like opera.** (アメリカ人のなかにはオペラが好きな人がたくさんいる)のようなタイプの存在文では、**Americans** は **object** レベルであり、**Americans** の集合を領域とし、量化子 **many** がその割合を示す構造を持ち、その解釈領域は談話モデルの中の共有知識領域であると考えられる。

また **kind** レベルの存在は、**there** 構文では表現できず、**Ghosts do not exist.** (幽霊なんて存在しない)のように **exist** という別の存在動詞を使わなくてはならない。談話モデルでは **kind** レベルの存在は共有知識領域に登録されると考えられ、強い存在前提を持つ。**Ghosts do not exist.** はメンタル・スペース理論で言う「間スペース文」であり、ふたつのスペースにまたがって解釈される。ひとつは俗信スペースであり、幽霊はそこで談話指示子として登録される。もうひとつは現実スペースであり、そこでは幽霊は登録されていない。したがって **Ghosts do not exist.** は、「君の俗信スペースに存在を持つ有名は、現実スペースでは存在を持たない」ことを意味する。このように強い存在前提を持つ **kind** レベルは、異なるスペースにまたがらないと存在言明を受けることができないことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- (1) 東郷雄二、「半過去の照応的性格 連想照応と不完全定名詞句の意味解釈から」、『フランス語学研究』42 号、17-30、2008 年、査読有
- (2) 東郷雄二、「**Je t'attendais.** 型半過去再考」、『フランス語学研究』41 号、16-30、2007 年、査読有
- (3) 東郷雄二、「不定名詞句転位と状況解釈」、『フランス語学研究』40 号、1-13、2006 年、査読有
- (4) 東郷雄二、「冠詞は何を表しているか 意味論と語用論のはざままで」、『エネルギー』(ドイツ文法理論研究会) 31 号、1-20、2006 年、査読無

[学会発表] (計 4 件)

- (1) 東郷雄二、「二種類の存在文と探索領域文脈依存性の一考察」、日本フランス語学会 247 回例会、2008 年 5 月 23 日、青山学院大学
- (2) 東郷雄二、「思い出しの夕と半過去のメカニズム」フランス語談話会、2007 年 10 月 13 日、京大会館
- (3) 東郷雄二、「状況モデルによる半過去分

析の試み」、日本フランス語学会 239 回例会、
2007 年 4 月 21 日、東京大学教養学部
(4) 東郷雄二、「フランス語時制体系におけ
る半過去の位置づけ」、日本フランス語学会
231 回例会、2006 年 4 月 15 日、東京大学教
養学部

〔その他〕
ホームページ

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/togo.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東郷 雄二 (TOGO YUJI)
京都大学大学院・人間・環境学研究科・教授
研究者番号：10135486

(2) 研究分担者

大木 充 (OHKI MITSURU)
京都大学大学院・人間・環境学研究科・教授
研究者番号：60129942